「異なり記念日」（光村図書　中学校２年ｐ.50～）

内容項目	C主として集団や社会との関わりに関すること　　家族愛、家庭生活の充実

１．本教材について

▼本教材には二つのテーマがある。
▼一つは「聴覚の障害について知ろう」というテーマである。本教材の齋藤陽道（はるみち）さんとまなみさんは、言語を習得する前に音声を聞くことができなくなった「ろう者」であり、二人の子どもである樹（いつき）さんは耳が聞こえる聴者である。
▼もう一つのテーマは「家族のつながりについて考えよう」である。陽道さんの樹さんへの愛情は、あふれるばかりだが、樹さんの成長につれて、聴者である樹さんとろう者である両親との間には様々な違いが生まれる可能性がある（参考資料１，２参照）。その一つは使う言語に関することである。樹さんは成長するにつれ、音声言語である日本語を学習し、使用するようになるが、両親との間で使用する言語は日本手話である。樹さんは両親を通じてろうの世界に、また、自らの音声言語を通じて日本のマジョリティの世界にいる。つまり二つの世界で暮らすことになる。
▼「家族のつながりについて考えよう」というテーマでは、陽道さんが樹さんに「異なり記念日」と言ったことの意味を考えたい。陽道さんは樹さんの将来についてどのようなことを考えているだろうか。樹さんは、ろうのコミュニティにかかわる仕事、例えば手話通訳士になるかもしれないが、全く関係のない仕事につくかもしれない。例えば音楽家になったら、どうだろうか。自分の子どもが自分とは全く違った世界に属することになったら。このことは外国につながる子どもの家庭でも生じる問題である。日本に働きに来た外国人の家庭では、子どもは、成長するにつれ日本語が身近な言葉になり、それに反して母語を忘れていく。日本になじむのが難しい親とは、異なる世界に身を置くようになるということが起こる。
▼本教材は良い教材だが、大変難しい教材でもある。ひとつには、生徒たちが「ろう者」に関することをほとんど知らないからである。日本手話は日本語とは異なる独自の文法を持った非音声言語であること、参考資料２にあるように、ろう文化という呼ばれる独自の習慣などがあることを理解する必要がある。したがって本教材は２時間扱いで行いたい。

２．本教材を扱う際に、特に注意すべきだと考えたこと

▼1 限目では「聴覚の障害について知ろう」というテーマを中心に扱う。まず手話などについての知識を理解する必要があり、それを踏まえて陽道さんの家族について考えてみたい。
▼2 限目の指導過程では、陽道さんは樹さんに「ぼくらは異なる存在だ」と告げる必要があると思っていることに気づきたい。そのうえで陽道さんと樹さんはどのような親子になっていくのかを考えたい。
さらに翻って考えれば、親子は皆 20 歳から 30 歳くらいの年齢差があり、どのような親子であろうと価値観のずれがあって当然である。陽道さんたちの家族のことを考えることで生徒が自分たちの家族の問題を考えることにもつなげたい。

３．指導過程

(1)《1 時限目》「聴覚の障害について知ろう」

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	身近に、聴覚に障害のある人がいるか聞いてみる。 ・聴覚に障害がある人は、日本全体で何人くらいいるかな？ →厚労省調べでおおよそ 34 万人　マイノリティであることを押さえる。	・障害者数は定義によって変わることに留意。 ・聴覚に障害がある人は、見た目ではわかりにくい。
展開	教科書で「ろう者」の定義を確認。教科書の該当箇所を見ながら斎藤さん一家のことについて以下の点を押さえる ▼陽道さんとまなみさんはろう者。ろう者について次のことを説明する。 ①ろう者は、耳で情報を得ることも発語も難しいので、自分たちのコミュニティを作っている。このコミュニティでろう者たちがコミュニケーションをとるために長い時間をかけて手話を生み出した。 この手話を日本手話という。日本手話は日本語とは異なる文法を持つ独特な言語である。（参考資料１） ②両親が聴者で、ろう者のコミュニティにかかわることが少ないと日本手話を使いこなすことは難しいが、ろう学校は日本手話を学ぶ機会になっている。 ③しかし、長い間、ろう学校では手話を使うことが禁止され、口話法によって教育が行われていた。 ④口話法はろう者にとって負担が重く、ろう者は手話を使って教育を受けられるよう要求していた。 ⑤最近ではろう学校でも手話を使うことが少しずつ認められるようになっている。日本の各地でも手話言語条例ができる様になった。→全日本ろうあ連盟の HP にアクセスして自分が住んでいる地域の手話言語条例を調べてみよう。 ⑥日本手話とは別に日本語を手話で表現する手話も使われることがある。（日本語対応手話） ▼樹さんは母語として手話を覚えた。 ▼樹さんは２歳。身近にいてケアをしてくれる人（多くの場合は親）との一体感を強く希求する年代から自他の区別をする年代へと移行する時期に当たる。樹さんは音楽を発見し、父親も同じように音楽を発見するだろうと思った。その期待が崩れて数秒間、「身じろぎもしなかった」。 《発問》なぜ「身じろぎもしなかった」のだろうか	・口話法については教科書ｐ.56 参照　最近では人工内耳を埋め込むことも行われるようになった。 ・全日本ろうあ連盟の手話言語条例マップを参照するとよい。 全日本ろうあ連盟の URL https://www.jfd.or.jp/sgh/joreimap ・母語というのは、誕生後、最初に受け取る言語のこと。

	グループ別に言葉を使わないロールプレイ 4、5人のグループに分かれてｐ.51の7行目「お父さん。お父さん。」からｐ.53「永い数秒だった」までを、言葉を使わないで演じてみる。樹さんと陽道さんの気持ちを想像しながら演じることで、二人の気持ちを追体験できる。言葉を使わないロールプレイについては参考資料３を参照。 時間があればロールプレイをして感じたことなどを発表してもらう。	・参考資料（３）参照
まとめ	マイノリティである「ろう者」は、様々な不便の中で暮らしている。対等な共生のためには、マジョリティである聴者はどのようなことをすればよいだろうか、と投げかける。	・クラスに一人耳の聞こえない徒が入ってきたらどうするか、考えてみたらどうだろうか。

(2)《2限目》「家族について考えよう」

	子どもの活動や教師の発問等	留意点
導入	前の時間の内容を確認する。	
展開	陽道さんが、「ぼくらは異なる存在だ」と言ったのはどういう意味だろうか。 《補助質問》①耳が聞こえない親と聞こえる子どもとの関係には特別な困難がある。その困難はどのようなことだろうか。 《補助質問》②耳が聞こえるということがわかった時、陽道さんとまなみさんはどう感じたと思うか。 《補助質問》③ろう者の中には「子どももろう者である方が良い」と思う人がいるということを生徒に投げかける。なぜそう思うだろうか ※正しい答えはないのでいろいろと想像してもらう。生徒とともに考えたい。 グループ討論 4、5人の班を作って話し合ってみよう。 ・陽道さんが樹さんに「ぼくらは異なる存在だと告げる」ことの意味は何だろうか。 ・「異なり記念日」という言葉には、陽道さんの樹さんに対するどんな思いが込められているだろうか。 ・陽道さんは、まなみさんとどんな家族を作っていくつもりだろうか。 話し合ったことを発表する。	・親がろう者であることで子どもが差別されることもあることに留意する。できれば具体例を交えて説明する。 ・本ホームページの「ぼくの名前、呼んで」(光村図書小学校6年指導案の参考資料を参照) ・参考資料４，5、参照

まとめ	・生徒の発表にコメントする。 ・「異なり記念日」という言葉には、陽道さんの家族に対する思いが込められている。陽道さんの家族への思いを読み、聴者とろう者の人たちはどう繋がっていけばよいのだろうか、考えてみよう。 ・また、どんな家族にも構成員それぞれには違いがある。君たちの場合はどんな違いがあり、違いがあることでどんな思いがあるだろうか。自分の家族のありかたについても考えてみたらどうだろうか。と投げかける。	・聴者とろう者がつながっていくためには、圧倒的マジョリティである「聴者」のあり方が特に大事であることについても考えさせたい。 ・授業者が「正解」を言おうとするのではなく、今後考えていってほしいことを投げかけたい。

《参考》

渋谷智子「コーダの世界」医学書院　2009 年

コーダとは、ろうの親を持つ聴者の子どものこと。

最近ではコーダについて、映画やテレビドラマでも取り上げられるようになった。

映画「コーダ　あいのうた」はアカデミー賞を受賞。ＮＨＫＢＳでも放送された。

NHK ドラマ「しずかちゃんとパパ」「デフヴォイスー法廷の手話通訳士―」

NHK Ｅテレ「ナンブンノイチ」85 分の１のヒトって？手話通訳士（５分間番組　初回放送 2023.9.24）

厚労省の調査では、聴覚・言語障害がある人は約３４万人。一方、手話通訳士の資格をもつ人は４千人。８５人に対してひとり。裁判などの公的な通訳はこの資格がなければ担えない。だが、資格試験が難関の割に通訳の報酬は低いことが多く、なり手は少ない。

《参考資料》

１．日本手話について

全日本ろうあ連盟がアップしている手話言語条例マップに掲載されている「日本手話言語法案　修正案」（2018 年３月 31 日）では、『この法律において、「手話言語」とは、日本のろう者及び盲ろう者等が、自ら生活を営むために使用している、独自の言語体系を有する言語を指し、豊かな人間性の涵養及び知的かつ心豊かな生活を送るための言語活動の文化的所産をいう。』と規定されている。日本手話は日本語とは異なる文法を持った独自の言語である。聴者は日本手話ではなく、日本語対応手話を習うことが多い。日本語対応手話は、日本語を手によって表現したものである。

全日本ろうあ連盟の手話言語条例マップの URL　https://www.jfd.or.jp/sgh/joreimap

関西学院大学では第二外国語として「手話」を置いている。同大学 HP、言語科目の紹介

２．ろう文化について

ろう文化宣言

ろう者である木村晴美さんと市田康弘さんは 1995 年に「ろう文化宣言」をした。その内容は以下のとおりである。この宣言にはろう者の誇りが込められているように思われる。

「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」 ――これが、私たちの「ろう者」の定義である。

これは、「ろう者」=「耳の聞こえない者」、つまり「障碍者」という病理的視点から、「ろう者」=「日本手話を日常言語として用いる者、つまり「言語的少数者」という社会的文化的視点への転換である。このような転換は、ろう者の用いる手話が、音声言語と比べて遜色のない〝完全“な言語であるとの認識のもとに、はじめて可能になったものだ。(木村晴美、市田康弘「ろう文化宣言」現代思想編集部編『ろう文化』青土社、2000年、所収)

「ろう文化」は、聴者にとってはとても分かりにくいテーマである。NHK『みんなの手話』テキストには「コラム　ろう文化」という欄があって「ろう文化」について具体的な例をあげて説明をしている。その一つを紹介する。(NHKテキスト　テレビ2019　4～6月　p.96)

「どうして」と聞くこと
日本の聴者の文化では、「どうして」と聞くことは不満を表すことが多い。「これをやってください」と言われたとき、「どうして」と聞き返すと「やりたくない、なぜ私が？」というメッセージが伝わることがある。ろう者が「どうして」と聞くとき、そういうニュアンスがないことがほとんど。もし不満があれば、それをはっきり表現するからである。

ろう者の言うことは、概して表現が単刀直入で、シンプルであることが多い。前置きも聞こえる人に比べると短いという。ろう者は日本手話という独特な言語を使いながら聴者にはないマナーや習慣を作り出した。また、ろう演劇やデフスポーツなどを生み出した。これらを総称して「ろう文化」という。

３．言葉を使わないロールプレイ

5人のグループに分かれて教科書の該当箇所を熟読する。どういう点に注目して演じるか、話し合って決める。例えば①樹さんのおとうさんへの呼びかけ（楽しそうな表情）②なんだかわからないおとうさん　（「？」マークを紙に書いて頭の上に立てるなど工夫する）③「あった！」という樹さん（「ある」の手話が本文に説明されているのでそのまま演じてもよい）

「50音順で探すNHK手話CG」で必要な単語を探し、使ってみるのもよいと思う。

https://www2.nhk.or.jp/signlanguage/syllsear.cg

特に表情を工夫してみるように促す。

４．聴者とろう者の間で―渋谷智子へのインタビューから―

渋谷智子（「コーダの世界」著者）に対するインタビュー記事（『地域保健』2011年4月号、東京法規出版「渋谷智子のHP」 からアクセスできる ）より。

▼親がろう者で子どもの聞こえが懸念されるケースでは、「早く聴覚検査を受けさせたほうがいい」とおっしゃる保健師さんもいらっしゃるようです。これは「聞こえない」ことを多くの方がいけないことと思っているからですが、ろう者の中には、聞こえない子どもが生まれることを歓迎する人が少なくないのです。なぜかというと、自分と同じ経験を共有できるし、培ってきた人脈や経験がすべて子育てに生かせるからです。ろう者が聞こえる子どもを育てるのは、聞こえない子を育てるよりも大変な面があります。ろう者の親の中には「子どもはできれば聞こえない子がいい」と公言している人もいます。これはコーダにとってはいささか気の毒なことかもしれませんが、特に都市部の若いろう者たちには、そういう傾向が強いようです。例えばコーダだと、学校などでは音声日本語に接する時間のほうが長く、

親子で手話で十分に気持ちを伝え合えないこともありますが、ろうの親子ならそんなこともなく、ずっと自分と同じ世界を共有できる喜びがあるからだと思います。
自分はろう者であることをそれほど悪いとは思っていないにもかかわらず、周囲から「お子さんが聞こえて良かったですね」と言われると、自分を否定されているような気持ちになります。聞こえる子が生まれて、「言葉の習得はおじいちゃん、おばあちゃんに協力してもらうほうがいい」と言われると、凹みます。これから子育てをしようという敏感な時期なので、周囲の人たちは思い込みで言うのではなく、正確な情報を伝える気遣いが必要だと思います。

▼行政が介入するときには、聞こえる人と聞こえない人が暗黙のうちに持っている価値観が、違うということを理解しておかないと、お互いの期待がずれるという不幸なことが起きてしまいます。
親が聞こえる人で子どもが聞こえない場合にも、こうしたずれは起きています。例えば専門職が一生懸命発声練習をさせ、聞こえない子が「おかあはーん」と言えるようになり、それを聞いたおかあさんが感動したという話があります。でも、自分の出した声を聞くことのできない子どもにしてみれば、「おかあはーん」と発声できることにどれほどの意味があるのでしょうか。子どもが必要としていることはほかにもあります。誰のための訓練なのかを考えなければいけないと思います。

５．聴者とろう者の間で―イギル・ボラの場合―

イギル・ボラは韓国人の映像作家で、コーダである。ドキュメンタリー映画「きらめく拍手の音」の監督でもある。以下の文章は同名の書籍である『きらめく拍手の音』（2020 年　リトルモア発行）からの引用である。

「私は手で話し、愛し、悲しむ人たちの世界が特別なんだと思ってきた。正確に言うと、自分の父や母がだれよりも美しいと思っていた。口の言葉の代わりに手を使うことが、唇の代わりに顔の表情を微妙に動かして手語を使うことが美しいと。しかし、誰もそれを『美しい』とは言わなかった。世間の人たちはむしろそれを『障害』あるいは『欠陥』と呼んだ『うちの両親は聴覚障害者です』私はどこに行ってもこのフレーズをまず最初に言わなければならなかった。（中略）しかし、人々はすぐに当惑の表情を浮かべた。
同情と憐憫が入り混じった目つきとともに。私は両者の間でアイデンティティの混乱に見舞われた。父や母は、自分たちだけがもつ固有の言語があり、ろう者だけが持つろう文化があると、よく自慢げに手で話していた。しかし、口で話す人々はそれを理解できないため、聞こえる世界と聞こえない世界はいつも衝突するしかなかった。」